

# 青梅市文化財ニュース

第251号

平成20年9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

## 青梅市内にある遺跡の現状 その5

文化財ニュース第218号、第228号、第238号そして第248号まで4回にわたり青梅市内を流れる多摩川の遺跡についてご案内をしてきました。

今回はその続きとして霞川における遺跡のご案内をいたします。多摩川と霞川の地形上の大きな違いは、水源の違いや、川の長さ、分水嶺を基準とする流域面積の違いなどは明らかですが、河床において大きな違いがあります。多摩川は基盤となる岩盤の両岸を樋状に侵食しながら極端にくねりながら流れ続けています。岩盤を数十メートルの幅でくりぬく年数だけでも気の遠くなるような時の経過が考えられます。それに対し、霞川の河床は粘土層や礫層などの上を流れています。このことは、立川断層が形成した地形の影響もあり、山間部を曲がりくねって流れる多摩川と、土砂が溜まって平地となった所を流れる霞川での大きな違いとなっています。また、生活面となる台地までの侵食の深さは、多摩川では40mを超えるほどの場所があるのに比べ、霞川は10メートルにも満たない侵食状態であり、やはり平地を流れる川という状況から、現在では河川改修や調整池などが施工されています。遺跡の立地にも違いがあり、川の両側台地上を生活の場として利用していたことは同じですが、霞川では河川敷にも遺跡がある点で多摩川との大きな違いが考えられます。また、遺跡の範囲では多摩川と同じく、舌状台地や河岸段丘の沢と沢とで区切られた特定の台地が該当するほか、東西に長く延びた台地上が、遺物の出土状況や遺構の出土状態からみて遺跡の一単位として大きく把握できる場所も有ります。

今回は霞川流域の遺跡42箇所のうち主な遺跡を中心にまずは霞川右岸上流から下流へのご案内いたします。

JR東青梅駅北口から200メートルほど北に進むと突然大きな山が出てきます。この山の頂上と裾野（図中①と②）が大塚山遺跡です。現在、山の上は水道の施設となっており、中腹は公園となっていることから遺物の採集は不可能になっています。かつてこの山の頂上から縄文時代早期中葉、今からおよそ7000年前の土器（田戸下層式土器）が発見されています。また、②の山のふもとにある遺跡では、下水道工事を行っていた際に土器片が発見され、調査が行なわれました。その結果、縄文時代中期（今からおよそ4000～5000年前）の勝坂式土器を中心に、打製石斧や礫器、磨石などが出土しました。中でも、高さ64cmの深鉢に表現された人体文の土器が重要となっております。欠損している口縁部には、かつて人面らしき把手がつけられていたと思われ、その下部には乳房と思われる突起が二箇所あり、胴部下方へ向けて、手のひらを三本の指で表したフォーク状の腕と手が表現されています。器面の裏では髪を束ねたような状態を太い渦巻状の文様により表現しています。市内にある駒木野遺跡や千ヶ瀬遺跡、竹原遺跡などでも、人らしきものや、mamushiなどの動物を表した土器が見つかっています。しかし、その土器の大きさや、大胆な表現の豊かさをもって人物の表現をしたこの土器は、大変重要なものとなっております。現在は、復元されて郷土博物館に収蔵されています。

この遺跡から1.5kmほど東へ進んだところ、青梅市野上2丁目266番地（霞共益会館北側）付近から川沿いに東へ約1キロメートルの範囲が霞台という台地で、ここには総面積が推定で326,400平方メートルもの大規模な霞台遺跡群が存在します。これまでに出土した遺物や遺構により、岩宿時代（旧石器時代）から奈良、平安時代まで続く遺跡の存在が確認されております。その中でも、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡が最も多く、昭和40年代半ばの青梅市には弥生、古墳時代の人々は住んでいなかったという定説を発掘調査により覆すこととなりました。調査は昭和47年4月、大門市民センター前の市道建設中に住居跡が発見されたことをきっかけに行なわれ、付近にある市立第三中学校校庭で確認されたという7軒分の住居跡を含めて40軒余りの住居跡の存在がこれまでに確認されました。このことから、霞川の直ぐ南側に位置する台地には多くの人々の自給自足の営みがあったことやその規模の大きかったことがわかってきました。なかでも図の③の地点では、住居が火災にあったままの状態出土した例として取り上げることが出来ます。住居跡には屋根部分がそのままつぶれ落ち、屋根を葺いていた茅や篠が炭化した状態で出土しました。当時の生活のままが発掘されたといっても良い状況なのです。調査結果では、隅丸形の住居跡の南側には物を潰したり叩いたりする台石と貯蔵用の甕（かめ）が置かれ、東側壁面付近には台付甕4点、坏（つき）2点、高坏1点、甕2点、甌（こしき）や小型壺、坏など各1点が、置かれたままの状態が発掘されました。このことから、当時の家屋における一般的な器種の構成がありのままわかるという貴重な発掘となりました。また、図中④の地点から出土した第15号住居址からは310点の炭化米が出土しました。専門家の分析によると、この米粒は荒川系や多摩川系に伝わる短粒ないし円粒とは異なる長い粒の米が含まれていたことに話題が集まりました。多摩川系でのこの長い粒の伝播は10世紀頃とされており、霞台遺跡へは別の系統でいち早く持ち込まれたものではないかと推定されています。

以上のとおり、霞川右岸の遺跡について半分ぐらいご紹介いたしました。霞台遺跡群は、山間を中心に営まれた縄文時代の文化から、霞川沿いでお米を栽培した初期の頃の文化への移り変わりが確認された貴重な遺跡ですが、広大な台地に生活の場を構え、数多くの住居を構えての村は現在ではその全貌はつかめません。発掘届が出るたびに調査区域を広げて行き、ついに43次に渡る発掘調査となっています。

そして出土資料は、膨大な発掘資料となっていますが、逐次博物館で展示を行っていますので、本物を見て当時の生活にはどのようなものを使っていたのかをご覧ください。（続く）

（文責 鈴木晴也）

